

一足の草鞋とテニスシューズ

尾形良道



さてテニスの事であるが、境内にコートを作りたいと思ったほどの「狂」である。

テニス歴は長い。父のラケットで軟式をやったのは中学時代、硬式を始めたのは高校時代にアメリカ留学の時。クラブに入って遠征試合もやった。当時はもちろんウツドのラケットで、ボールは白だけだった。地方ツアーに来た悲劇の王者オーストラリアのケン・ローズウォールからももらったサインは、大切に保存している。

岩手大学に勤めていた時は、ミニ国体で、山形県と岩手県の試合のレフリーを務めたことは忘れられない。

昨年ロンドンに行ったとき、真っ先に訪ねた所はウィンブルドンのセンターコートだった。

テニスコートで法事を思い出し、急いでテニスシューズから草履に履き替えたのは冷や汗ものだった。

テニスで汗を流すと血液の毒が流れ出る感じで、精神的な疲れのみならず、肉体的な疲労も取れるからたまらない。テニスをやる日は、朝からアドレナリンの分泌を感じる。「作務即禪」「一所懸命」に仕事をすることがそのまま禅の修行である。テニス三昧、これ「テニス即禪」か？

(陽春院住職・東北芸術工科大学教授・寒河江市)

「住職で大学の先生？大学では何を教えていらっしやいますか」とよく聞かれ「英語です」と答えると、少々意外な感じをもたれる。実は、父もまったく同じ職業だったので、英語の表現で言うならば、*stepped into both of my father's shoes. と同じことなる。*

小学校時代に先住(二代前)の祖父にお経を教わり、先住の父に英語の半ばスパルタ教育を受けた結果、自然にこんな事になってしまった。

英語でお経は読まないし、読めないが、仏教の味の付いた英語の講義は、少しは、出来る。たとえば、人がくしゃみをしたときは *God bless you!* のかわりに、*Buddha bless you!* とか、*Good bye.* (*May God be with you.*)は、仏教的には、*Bood bye.* となる。二つの職を持って一番困るのは時間が無いことである。

英語の教師でありながら、昨年六十三歳にしてようやく英国に行ってきた。それも、お寺と大学の仕事の合間を見て、たった六日間の旅だった。

「金は時なり」と言ったのは、渡辺昇一氏で

ある。氏は資料を探しに図書館に行く時間を惜しみ、自分の図書館を作られたという。要するに、お金で時間を買う訳である。

高速道路の利用はまさに「金は時なり」である。

私は、大学でコピー機の所に行く時間を節約するため研究室にコピー機を入れている。

寺では、電気掃除機は、本堂用と庫裡(住まい)用の二台を備えている。

大学の恩師は、新聞を読む時間を二十分と決めていたことである。私は、英字新聞は教室でも使うので、必ず読むが、他の新聞は、朝に「お悔やみ」の欄だけを見て、あとは就寝前の電気マッサージの上で読むことになってしまつ事もしばしばである。

気が付かないうちに伸びてしまった爪を切るのは赤信号になった時の車の中である(危ない?周りに目配りします)。その他、公表するに憚る時間はたはの捻出法を実施している。

そんなにこせこせして人生面白くないのではと思われるかもしれないが、こうして作った時間を何に活用するのかというと、テニスなのである。